

れいわ ねんど
令和5年度

だい かい こさいし たぶん かきょうせいしやかいすいしんきょうぎ かいかいぎろく
第1回湖西市多文化共生社会推進協議会会議録

きろくしや しみんか
記録者 市民課

にちじ れいわ ねん がつ にち げつ
日時：令和5年7月31日（月）14：10～16：30

ばしょ こさいしけんこうふくし とくべつかいぎしつ
場所：湖西市健康福祉センター（おぼと）特別会議室

しゅつせきしや たかはた さち たまき よしひさ しばた まさのぶ しげい
出席者 高畑 幸、玉置 美久、柴田 政宣、ホセ カルロス、重井 アマンダ、末吉 由佳、
かわかみ かおる なかむら てつや たかはし のりこ ほしし えりこ たかはし としひろ たけい よしき
川上 薫、中村 哲也、高橋 典子、吐師 恵理子、高橋 俊裕、竹井 嘉樹

じむきょく しみんあんぜんぶちよう やまもと けんすけ しみんかちよう とよだ ゆういち
事務局 市民安全部長 山本 健介、市民課長 豊田 雄一、
しみんかきょうどうきょうせいかりちよう こばやし けいこ
市民課協働共生係長 小林 景子

1. 開会

2. 委員・事務局自己紹介

3. 会長・副会長の選出

かいちよう こさいし たぶん かきょうせいしやかいすいしんきょうぎかいせつちようこうだい じようだい こう きてい がくしき
会長：湖西市多文化共生社会推進協議会設置要綱第4条第2項の規定により学識

けいけんしや たかはたさちいん せんニン
経験者である高畑幸委員を選任

ふくかいちよう じようだい じようだい こう きてい かいちよう なかむらてつや いいん しめい
副会長：要綱第4条第3項の規定により会長が中村哲也委員を指名

4. 会長あいさつ

5. 議題

ぎだい (1) だい じ こさいし たぶん かきょうせいすいしん れいわ ねんどしんちよくじようきょうほうこく
議題(1)第3次湖西市多文化共生推進プラン 令和4年度進捗状況報告について

【資料1】

じむきょく
《事務局》

しりよう だい じ こさいし たぶん かきょうせいすいしん れいわ ねんどしんちよくじようきょう ほうこく
資料1により、第3次湖西市多文化共生推進プラン令和4年度進捗状況を報告。

しつもん いけん
《質問・意見》

いいん
(委員)

「プレスクール事業」を他の自治体では3月に行っていることが多いが、湖西市では年間を通じて行っているの、これについて説明を。

じむきょく
(事務局)

湖西市では、「通年プレスクール事業」と「春のプレスクール事業」の2つを実施している。「春のプレスクール事業」は、他自治体と同様の事業で、2月と3月に行い、4月から小学校1年生に入学する子どもとその保護者が対象。学校生活のことや簡単な文字や算数、挨拶などを学ぶもの。一方、「通年プレスクール事業」は、他の自治体では初期支援と呼ばれているもの。対象は、湖西市に転入し、公立の小・中学校に通学予定の児童・生徒で、保護者が希望する場合に行っている。事業は湖西国際交流協会に委託しており、15日間行う。先生と生徒とはほぼ一対一で、子どもの

ペースに合わせて日本語の初歩や学校生活のことを学び、それから学校に編入する仕組みになっている。

(委員)

資料1施策No. 11、日本語教育の推進に係る体制の整備について。現在、日本語ボランティアがごく不足している。日本語教育推進会議の場で、経験者へのボランティアの打診やボランティアへのサポート体制が作られると助かる。

(事務局)

今年度、全4回の内容で日本語教育推進会議を行っており、3回目まで終了している。その中で、人材の確保、人材の研修は課題として挙がっている。ボランティアや補助者が不足しているという話もあり、「ボランティアを広く募集し、湖西市が行う日本語教室の意義というのを研修で理解してもらえると良い」という意見をいただいている。

(委員)

ボランティアに学校の仕組みをよく知っている方、例えば定年退職した先生が多くいると、子どもたちがスムーズに学校の仕組みもよく理解して、学校生活が送れるのではないかと思う。

(委員)

資料1施策No. 1の税金の未納について詳しく説明を。

(事務局)

市県民税の税額がわかるのは毎年6月。それより前に帰国した方に、税金を納めてもらう方法について商工会と話し合いの場をつくり検討したが、法律の制約が多く（改善方法を見つけるのは）難しかった、という内容。

(委員)

帰国前に請求される税金は納めていると思うが、帰国後の税金は未納という意識はないのでは。

(委員)

県税でも同じことが起こっていると思うので、対策を把握されてはどうか。

(委員)

他自治体の動向も確認してはいかがか。

(委員)

多文化共生事業の成果がどれくらい上がっているのか、どの程度周知されているのか、という実績の把握はされているか。

(事務局)

すべては把握できていないが、実績は資料1のとおり。

例えば、何人参加したか等、把握できているものはここに実績として挙げているが、アンケートをした結果、良かった人がどれくらいかという把握はできていないのが現状。

(委員)

介護保険制度について、65歳を超えている数名と話をしたことがある。その中で制度が分かっている人は3人いて、その内1人は介護保険に興味があると話していた。多言語で介護保険制度

はどんなものかを説明すると制度がわかる。制度が理解できていなくて難しく思われているが、制度が分かれば利用される。知らせることが必要。

(委員)

市役所からの情報について。日本語は話せるが読むことは難しいブラジル育ちの人でも、日本国籍だとポルトガル語の案内が来ない。反対に、ブラジル国籍の人にはポルトガル語の案内が来るが、日本生まれの外国籍の人の中には日本語のほうが読みやすいという人もいる。「国籍=その国の言語がわかる」ではないことがあることを知っておいてほしい。

(事務局)

外国語のお知らせを個人宛に送る時には、国籍で言語を選んでしまうが、今の意見を受けてウェブサイトには(日本語も含め)多くの言語で情報を載せる必要性を感じた。

(委員)

資料1.p18外国人支援班のマニュアルを更新するということについて説明を。

(事務局)

外国人支援班は、湖西市の防災体制の中で市民課長と市民課協働共生係の5人で組織される。マニュアルは、災害が起きたとき、外国人支援班が何をどうするか、どういった連絡先があるかといったようなことが書かれたものである。毎年防災訓練の度に、実際に動いた想定をしたり、不明点を話し合ったりしており、その結果をマニュアルに書き込み、更新を行っている。

(委員)

資料1.p18避難所運営マニュアルのポルトガル語版作成について、外国人市民は、今まで防災訓練に参加していたか。または、防災訓練や避難所運営に参加していなかったからポルトガル語版を作成したのか。

(委員)

表 鷺津地区では、新型コロナウイルス流行前は、外国人市民も防災訓練によく出ていただいていた。

(委員)

あけぼの地区について、アパート関係の外国籍の方が多い。おそらく、自治会の回覧物が回らず、防災訓練が知られていないのではないかと。子どもがいればわかるかもしれないが。

議題(2) 第3次湖西市多文化共生推進プラン 令和5年度取り組み計画について

【資料1】

《事務局》

資料1により、第4次湖西市多文化共生推進プラン令和5年度取り組み計画について説明。

《質問・意見》

(委員)

資料1.P5No. 11 日本語教育推進会議について、協議提言をいただくにとどまるのではなく、年間何名を目標にするなど、日本語ボランティアの確保まで計画に入れてほしい。

(事務局)

9月に日本語教育推進会議から提言をいただく予定となっている。今年度後半に、提言の内容をどう行っていくのかを考える。その際、日本語支援ボランティア不足に対し人材をどう確保するか計画に入れていきたい。

(委員)

どの自治体でも、日本語を教える方々、ボランティアは高齢化してきたり、企業の講師になったりして、ボランティアを確保するのが難しくなっている。日本語ボランティア養成講座は行っているか。

(事務局)

令和元年度に開催したが、継続して行っていない。

(委員)

日本語教室のボランティアが既に不足しているので、即効性のある計画にしてほしい。

(委員)

市単独でなくても他自治体の養成講座案内などの方法もある。

(委員)

新居小学校はポルトガル語の通訳が週5日。近隣中学校は週1回。新居は外国人児童が増えてきている。教員不足であり、ニーズがあっても取り出しがやれない場合も少なくない。新居小はたまたま取り出しができています。

子どもは日本語で日常会話ができるが、保護者と子どものコミュニケーションが取れないことが困っている。保護者の国籍が日本国籍でも日本語はわからなかったり、家族の中でみんなが同じ国籍でなかったり、と様々。

(委員)

鷺津中学校は常時ポルトガル語、スペイン語の通訳がいる。ブラジル、ペルーの生徒にとっては良い相談相手にもなっている。外国生徒の指導はふれあい教室で教えている。定年退職した先生と現任教員の2名で指導。外国生徒の指導だけでなく、学校の教員自体が不足。教える人をどう育てるかが大事になってきている。日本語指導をできる人を養成していかないと、やる人は出てこないと感じる。

(委員)

高校は、小・中学校よりも支援が少ない。通訳は月1～2回。保護者宛て文書の翻訳、入学式、三者面談などは、別途通訳を依頼している。4割外国籍生徒がいるので、通訳などの支援者が常にいてほしいと感じる。子どもたちが、日本人でもないブラジル人でもないしと、中途半端な状況になってしまう。日本語もポルトガル語も書けないし、読めない状態になるのがかわいそう。子どもたちの教育に力を一番入れてほしい。若者をしっかり見ることが、多文化共生社会への重要な課題。

(委員)

外国ルーツの子どもたちの教育に力を入れほしい。日常会話が分かっても学習言語が分からない。小学校から中学校にいくと学習のハードルが高くなる。低学年のうちから日本語の基礎を学べる環境が必要だと感じている。ボランティアに頼っていてもだめ。人材不足ではあるけれど、日本語の教育について、短期に効果的な指導をできる方が理想。

(委員)

日本に来て、年齢的には3年生でも日本語能力、日本社会に対する知識がゼロという子がいる。KOKO（湖西国際交流協会）にきている子どもは宿題を大量に持ってきている。KOKOにあるプリントをなんとなくやって、中学校もなんとなく卒業はできてしまうけれど、それ以降はすごく困っていく。6年生で日本に来た中国人で、日本語能力はゼロだったが、毎日KOKOで勉強して、保護者も熱心だったこともあり、進学校にいて、有名私大に合格できた子がいた。やる気があって、親も協力している子もいっぱいいる。確実なサポート体制ができるといいと思う。

(委員)

保護者がしっかりしている親と、なんとなく出稼ぎだけと思っている親がいるが、犠牲になるのは子ども。学校には入れておくと、国に帰るから日本語も覚えなくていいと考えている親がいるが、5年たつと、やっぱり日本にいるという場合が多い。そこから日本語を覚えることになるが、年齢が10歳、15歳だったら手遅れ。先生たちは、一生懸命やってくださっていて、家族や子どもへの努力次第である。

(委員)

低学年の子どもは、ポケットークなどの機械を使うほどの語彙がない。また、家族で会話する以外のポルトガル語は知らないため、親の国に帰っても、親と話すレベルの母語力しかない。母語も日本語もできるようになるか、両方できないかのどちらか。個々の家庭状況があるから難しいと思うが、本来は家庭でそういった話をしてもらいたい。

(委員)

外国人市民の子どもたちの犯罪の場合、子どもはある程度日本語がしゃべれるが、親が全く日本語をしゃべれないというケースが多く、子どもと親の乖離があると感じていた。子どもたちが集まった時に、悪いことを覚えてしまうと、ネット社会でどんどんつながる。

(委員)

子どもたちを大事にしてほしいが、裏には親の問題がある。外国籍の働いている方たちが、日本語を学ぶと得ということに気付いてもらって、派遣の流れから抜けさせてあげたい。しかし、親と同じでいいとなってしまうがち。

(委員)

外国人市民のおかげで仕事が回っている。その陰で子どもたちが犠牲になっている。子どものことを真剣に考える親もいる一方で、稼ぐことに一生懸命な場合もある。日本にいても中途半端、母国に帰っても中途半端となってしまう。プランでやるべきは、子どもの将来のための事業と親の理解を得ること。湖西市の企業が協力しないということはない。そこに焦点をあてて、次のプランを考えた方がいい。子どもが犠牲になっているような湖西市では仕方ない。

(委員)

外国人市民が9割ぐらいの集合住宅がある。土日に夜中の2時くらいまで小学生が集まってきて遊んでいる。企業も昼と夜の仕事がある。父母がいない家もある。小学校1年生で、全く日本語が分からなくて廊下をぶらぶらしている子もいる。

(委員)

新居小学校に行く低学年の子どもが増えている。夜中の騒ぎはない。おはようと声をかけるとおはようと返ってくる。

(委員)

夜中2時に遊んでいたなら非行につながりかねない。前任地では、中学3年生～高校生で非行に走りやすい印象。特に薬物が多い。外国人コミュニティの先輩を頼って買ってしまうようだ。日本社会で犯罪が減ってきたのは、小さいころからの教育のおかげ。外国ルーツの小さい子にも防犯、交通の教育機会があれば、犯罪は減る。外国語での防犯教室を湖西でもできればと思いつつ、人手が不足している。

(委員)

外国人市民に焦点が当たりやすいが、日本人もお互いに知り合う、理解し合うことが大事。日本人が一番友達になりにくい、返事が「そうそう、うそ～」くらいしかないので会話しても無駄と言う人もいる。そもそも自分の言葉を聞こうとしないと感じるし、一回そういうことがあると次は声をかけない。周りに違う言語の人が住んでいるからこそ、その人たちがどういう人なのか、知りたいという気持ちがわくといいなと思う。ごみ捨てに行くと、日本人にあいさつしたら、知らない顔をされたこともある。ごみ収集は午前8時だけど、前日の夜に捨てている日本人も多い。

(委員)

日本人は人口減少しているが、外国人は若い。その力を上手に活用できたら、いい社会になるのかなと思う。多文化共生の地域をどういう風に創っていくか、お互いに考えてほしい。

以上